

日本語教育プログラムにおける「友達づくり」 の第一歩を意識化する授業実践の試み

—日本人と友達になろう—

A First Step of “Making Friends with Japanese” in Japanese Language Program

- For Making Friends with Japanese -

林 里香

千葉大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程修了

本稿では、留学生が日本に滞在中、言語的な問題だけでなく、社会文化的な問題や社会言語的な問題にも遭遇すると考え、彼らの身近な問題（日本人と友達になる）に対して意識を喚起させ、問題解決の方法を考えていくことを目的とする。

近年、留学生を取り巻く環境は変化を続け、目的も修学期間もさまざまである。今回、筆者は、某大学の日本語教育プログラムの一部として「日本人と友達になる」ことについて留学生の意識喚起をする授業を行った。留学生は、この授業で、これまでの友人関係を振り返り「友達は自然にできる」と思っていたことに気づいた。また、「日本人と友達になる」ためには、どのように自分から働きかけをするかを考え、意識的に場所や時間を共有する必要があることを意識化することができた。そして、友達関係を継続させるための方法などについても具体的に考えることができた。

キーワード：日本語教育、留学生支援、相互理解、友人関係、意識化

1. はじめに

1983年、中曽根康弘内閣によって「留学生受け入れ10万人計画」が打ち出された。これは、当時1万人程度だった留学生を21世紀初頭には、10万人を受け入れることを目指したものである。2003年には、目標の10万人を超え、2007年12月31日現在では、2132,460名の留学生が来日し滞在している。

日本に在住する外国人は、法務省が定める「出入国管理及び難民認定法」に基づき在留資格を受け、生活をしている。資格規程の一つである「留学」資格¹によって滞在している外国人の数は、在日外国人全体（2007年12月31日現在）である2,152,973名の6.2%に当たる²。中国・韓国を始め、アジア地域からの留学生が大半であるのが現状である。

また、福田康夫首相が2008年1月の施政方針演説で「留学生30万人計画」を掲げ、25年ぶりに政府が留学生受け入れ政策を制定した。この計画は、2020年を目前に30万人の留学生を受け入れることを目指している。拠点大学30校を指定し、9月入学の促進など、受け入

れ態勢の整備の充実を図る方針である。

このように留学生を取り巻く環境は変化し続けている。また、在日留学生の出身地や修学期間、目的などは様々で、大学における日本語・日本事情、及び日本社会への適応支援は留学生センター・留学生別科などが中心となって行っている。

来日時に日本語の学習経験がない学生はひらがな・かたかなから学習をはじめ場合もある。また、学習経験がある学生は、日本語・日本事情の授業を中心に参加する学生ばかりでなく、日本人の学生と同様の授業に参加し研究をする学生もいる。

2. 問題の所在

日本で学生生活を送っている留学生は、日常生活の中でどのような問題を抱えているのだろうか。

日本語能力のレベルによっては日本語母語話者の発話を聞き取ることができない、または理解することができないなどの問題が深刻な場合もあるだろう³。また、聞き取ることができても、相手の発話意図が理解できな

い場合もある⁴。このような聴解問題だけでなく、会話を円滑に進めるためには丁寧さやあいづち、終助詞の習得なども重要である。

もちろん、留学生が抱える問題は、聴解問題だけでなく、漢字を含む読み書きの問題もある。また、このような言語的な問題だけでなく、社会文化的な問題や社会言語的な問題もある⁵。

例えば、クラスなどの複数の前で自己紹介をする場合には、「どうぞよろしくお願ひします」と言うことで、自分の自己紹介が終了することを明示的に示すことができる⁶。これは、次の人への合図となる。しかし、このルールを知らない場合、自分の自己紹介の終了が曖昧になり、次の人が自己紹介を始めることが難しくなる。このことは、留学生が「どうぞよろしくお願ひします」という表現と意味を理解していても、どこで使うことができる表現なのか、またはどこで使わなければならない表現なのかを習得していなければ問題が起きる場合があることを示している。

3. 本研究の目的と研究の方法

本研究は、某大学の日本語教育プログラムに参加している留学生⁷を対象に彼らの身近な問題（日本人と友達になる）に対して意識を喚起させ、問題解決の方法を考えていくことを目的とする。

留学生にとって「日本人と友達になる」ことは、日本に留学すれば自然に実現できるものではなく、苦勞している声が聞こえてくる⁸。意識化してネットワークを広げ、積極的に友達づくりをする姿勢を養うことが必要であると考えられる。

本研究では、留学生に対するインタビューから問題（日本人の友達ができない）の抽出を行った後、問題解決のための意識喚起の授業実践を行う。授業中の留学生の発表を検討し考察を加える。

4. 対象者の背景

この実践の対象となった5名は、東京都内の某大学の留学生である。対象者は、短期留学生（1年間）4名と特別研修生1名（半年）である。彼らは、2008年9月に来日し、大学側が用意した寮で生活をしている。日本への来日が初めての者もいれば旅行やホームステイで来日した経験のある者もいる。寮には、某大学に正規入学している留学生や日本人学生も入寮している。

短期留学生は、提携校から1年の留学を予定し来日している。提携校は中国、アメリカ、イギリスなど様々だが、毎年スイスとフランスからそれぞれ2名ずつ来日している。彼らの提携校はスイスとフランスにあるが、必ずしもスイス生まれのスイス人、フランス生まれのフ

ランス人とは限らない。ヨーロッパの他の国からスイス、フランスの大学に留学し、その大学の交換留学プログラムを利用して日本に来日する場合もあるからである。また、両親が国際結婚をしており二重国籍を持つ者⁹もいる。

特別研修生1名は、半年の予定で来日している西アフリカのベナン共和国からの留学生である。

彼ら5名は、日常的にフランス語でコミュニケーションをとっている。しかし、もちろんフランス語が第一言語とは限らない。日本語についてはそれぞれの国で学習歴があるが、1名が日本語能力試験2級に合格している以外は自己申告で国際交流室へ提出された書類によると中級とのことである。筆者が授業をして感じるのは、残りの3名は日本語能力試験3級合格程度¹⁰であると考えられる。ベナン共和国からの学生は、他の学生に比べると漢字の習得数が少なく、読み書きが遅いため理解に時間がかかる場合がある。そのため、5名を1クラスとして授業を進める今回のプログラムには担当者側、チューター側の配慮が必要である。

5. 日本語教育プログラムの概要

日本語教育プログラムは、国際交流室¹¹が主催しているプログラムであり、プログラム担当者（筆者）が週3コマ（計4.5時間）日本語の授業を担当し、3名の学生（大学生、または大学院生）がチューターとしてそれぞれ週1時間ずつ（計3時間）日本語教育サポートを担当している。

チューターは国際交流室によって半期ごとに募集が行われ、国際交流室と留学生担当教員によって認定される。留学生はこの日本語教育プログラム（合計7.5時間）と正規の授業（履修登録をした授業）に参加することとなる。

プログラム担当者が行う3コマの授業は、特定の教科書を使い文法項目の説明や文作成練習を中心に漢字や聴解などを含めた総合日本語の授業である¹²。このプログラムによる単位認定はなく、成績などの評価もない。2007年9月から2008年9月の留学生は、帰国前に日本留学試験¹³を受験したいとの希望があったため、特定の教科書による学習を中断し、試験対策を行った。

学生チューターの日本語教育サポートは、国際交流室、留学生担当教員、日本語教育プログラム担当者（筆者）が学期の始めにミーティングを行い、内容の選定を行っている。今期は、語彙の増強と会話タスクを中心に、新聞記事の発表なども行っている。

6. 授業計画

本授業は、2008年10月に日本語教育プログラムの一部として行われたものである。以下、本授業を計画した経緯を述べる。日本語教育プログラム内の授業担当者の授業のカリキュラムについては、筆者が作成し国際交流室に提出している。今期のプログラム全体のカリキュラムを考える際に、前年の留学生（2008年8月に帰国済み）に対する授業の記録やアンケート、インタビューを振り返った。授業担当者は、授業内で情報として提供した社会文化的な情報（地震体験施設やそば打ち体験）が肯定的に評価されていたことから、それらの情報が日本人の友達から得られないかと考えた。6.1 前年の留学生に対するインタビューの振り返りでは、留学生の具体的な意見を紹介し、授業開発に必要な考察を加える。6.2 本時の目標で、授業者側の意図を述べる。6.3 授業の流れで、授業案を示し、6.4 授業の内容で具体的に個々の活動の説明をする。

6.1. 前年の留学生に対するインタビューの振り返り

昨年度、同じ環境で留学していた学生から、授業担当者は留学環境についてさまざまな意見を聞く機会に恵まれた。1年の留学を終え、帰国する直前に日本語能力だけでなく、日本での生活についても質問した。彼らから聞かれた意見で興味深かったのは、「日本人の友達があまりできなかった」というものだ。

以下に、留学生の意見をまとめる。

・留学生 A さん

ルーマニア（フランスに留学中、提携校の交換留学生として来日）からの留学生 A さんは、日本に1年間留学することをとても楽しみにしていた。また、日本人学生も住んでいる寮に滞在し、大学に通うことで日本人の友人がたくさんできることを期待していた。しかし、帰国目前のインタビューで、彼女は、上記のように「日本人の友達があまりできなかった」と話している。

その理由を尋ねると、日本人は初対面で「友達になってください」と声を掛けてくることが多いと話している。彼女曰く、「友達になれるかどうか、始めは分からない」とのことである。また、フランス語を話すことを目的に友達になろうとする学生もいたと答えている。実際に友達になることができたのは、一緒に食事や買い物に行った学生、数人だと話している。

来日当初は、フランス語を話すことを期待されるのをあまりよく思っていなかったと考えられる。また、同じプログラムに参加しているフランスからの留学生ととても仲良くなり、いつも2人で行動していた。2人でバーゲンに行ったり、国内旅行へ行ったりするなど、日本を楽しむことができていた。そのため積極的に「日本人と友達になる」ための働きかけをしなかったと考えられる。また、日本人学生と一緒に授業に出る機会もあった

がグループが既にできており話すのが難しかったと話している。

・留学生 B さん、

ポーランド（スイスに留学中、提携校の交換留学生として来日）からの留学生 B さんは、サークル活動に参加したり、大学以外で書道教室に通ったりしていた。サークルの日本人学生には、「なんかあったらいつでも連絡してね」と言われ、携帯の電話番号とメールのアドレスを交換したが、日本人学生側からはほとんど連絡がなかったと話している。また、「どこか行きたいところがあったら言ってね」と言われることもあったが、「行きたい場所には自分で行くことができる」と答えている。授業を担当していた筆者が地震を体験することができる施設¹⁴やそば打ちの体験ができる場所があることを授業内で紹介したところ、そのような場所があること自体を知らなかったと話している。これは、B さんにとって新しい情報を得ることが難しく、面白い場所や行きたい場所が分からないことが問題だったことを意味している。日本人学生は、「いつでも問題があったら助けるよ」という姿勢を示しているが、B さんはサークル活動で一緒だった日本人学生に頼ることはなかったと答えている。

日本人学生とは、学内で会えば挨拶もするし、話もする。しかし、彼女にとって日本人学生の多くは「知り合い」程度で友達に発展することはなかったのだと考えられる。

もちろん、彼らにまったく日本人の友達ができなかったわけではない。一緒に食事や買い物に行ったり、歌舞伎を見に行ったりしている。しかし、ある限られたイベントを共有するだけではなく、友人関係を継続させることについては難しく感じていたことがインタビューから明らかになった。また、日本語プログラムに参加している留学生は5名と少ないため、日本の文化体験などにまともに参加していた。そのため個人的な友人関係を築く努力は個人に任せられていたと考えられる。

授業担当者は、これまで多くの留学生と接してきた経験¹⁵から、留学生が持っているネットワークについて興味を持っていた。また、自身が学生だった頃に行っていた個人チューター活動などからも留学生によって日本人学生との接し方に違いがあることを感じていた。

以下に、授業担当者が個人チューターとして接していた留学生についてまとめる。

・留学生 C さん

中国からの短期留学生だった C さんは、筆者がチューターとして始めて会った時にはすでに携帯電話を持っていた。筆者が経緯を尋ねたところ、他の中国人留学生に手伝ってもらい、来日した次の日に契約に行ったとのことだった。また、C さんは、交流パーティーなどの日

時を知らせると、すでに知っていることが多く、中国人留学生だけでなく、他の留学生とのネットワークからも情報を得ることができていた。また、日本人とは、授業やアルバイト先で定期的に接する機会を得ていた。

・留学生 D さん

ドイツからの留学生 D さんは、サークル活動¹⁶⁾に参加し、サークルの飲み会やお花見に積極的に参加していた。留学して約 2 ヶ月後に行われた大学祭では、日本人学生と一緒に模擬店の売り子として参加していた。年末には、サークルで友達になった日本人の家にホームステイし、日本のお正月を体験していた。同じドイツからの留学生と一緒に行動する場合も多くあったが、サークルには一人で参加していた。また、日本人アーティストのコンサート会場で知り合った日本人とも友達になっていた。このように D さんは、個人的な日本人ネットワークを築いていた。

上記のように、留学生が「日本人と友達になる」ことは、ある人にとっては容易であるが、ある人にとってはとても難しい問題となっている。個人で行動し、日本人の輪に入っていくことができると友達になれる可能性がでてくる。しかし、受け身な態度だけでは難しく、積極的に関わる努力が必要なようである。また、友達関係を維持するためにどのような働きかけをするかも重要だと考えられる。

本研究の対象者 5 名は、留学生 A さん、B さんと類似する環境¹⁷⁾にある学生である。筆者は、対象者の 5 名が授業後も行動を共にしている場面や、昼食は学食ではなく教室でサンドイッチなどを食べている場面をよく見かけていた。また、夕食について尋ねると外食することはほとんどなく、寮の自分の部屋で食べているとのことだった。そのため、1 年後の留学終了時に彼らと同じような問題が起きる可能性があるかと予測することができた。

これらのことから、授業を計画するにあたり、「日本人と友達になる」ための意識喚起と方法について考えることを目的とした。このテーマを選択した理由は以下の通りである。

(1) 留学生の意見

- ・日本人の友達ができない

(2) 授業担当者の興味・関心

- ・留学生はどのようなネットワークを持っているのか

上記の 2 点の視点から、特に以下の点に注意した授業計画を作成した。

<導入部分>

授業の導入部分で振り返りによる気づきを促すこと

からはじめることにした。その理由は、教師側が彼らに起こると予測される問題（日本人の友達ができない）を提示するのではなく、振り返りによって自分自身で気づくことが重要であると考えたためである。また、問題を提示されるだけでは、その問題が自分に起こるかどうかが実感を持てず、授業中に自分の問題として考えることは難しいだろうと考えたからである。

<展開部分>

展開部分では、新情報や関連語彙の提供のために読解教材を使用することにした。授業中に学生に意見を発表させる場合、テーマに関連する語彙がクラス内で共有されている必要があると考えられる。それは、語彙が共有されていない場合には、他の学生の意見が理解できない場合だけでなく、自分の意見を発表する場合に躊躇することがあると考えられるからである。読解教材であれば、自分の意見との類似点や相違点を見つけ、発表の際に表現を使う練習にもなると考えた。

6.2. 本時の目標

授業担当者は、本時の目標を以下の 3 点とした。

(1) 人間関係（友達）について考える

- ・自分の経験を振り返る

(2) 日本人大学生の人間関係に対する意識を知る

- ・類似点、相違点の顕在化

(3) 「日本人と友達になる」ための姿勢について考える

- ・方法の検討

対象者は、日本に来日してから約 1 ヶ月が過ぎていた。それぞれが日本での生活を楽んでいる様子であった。しかし、授業の開始時に週末に何をしたかなどの質問をすると 5 名が一緒に行動をしている場合や 5 名の中の 2 名、または 3 名で行動している場合が多かった。

まず、「どんな時にどういう方法（きっかけ）で友達になるか」を意識し、自分の経験を振り返る。そして、日本人大学生が人間関係についてどのように考えているのかを知り、自分との類似点や相違点を顕在化させる。最後に、これまでの 1 ヶ月の姿勢に対する振り返りと残りの留学生活における姿勢について考える。

授業担当者は、この授業を通して留学生に積極的、また意識的に日本人学生に働きかけ、友達になることを望んでいる。また、その関係を維持するために必要なことを留学生本人が意識し、振り返ることができるようになることを望んでいる。

6.3. 授業の流れ

本授業は、日本語教育プログラムのプログラム担当者の時間の 1 コマを使って行われた。このプログラムは、

2008年9月28日から始まっていた。プログラム担当者の授業計画は、第一回の授業開始までには国際交流室に提出されていた。この授業も当初より計画されていたもので、特別にカリキュラム変更をして組み込まれたものではない。

授業は、(1)友達について、(2)日本人大学生の人間関係に対する意識、(3)「日本人と友達になる」ための姿勢について、(4)まとめで構成されている。概要は以下の通りである。

概要：

日時：2008年10月27日（火）

9：00～10：30

場所：大学の教室

対象：短期留学生4名、特別研修生1名

教材：「学生座談会」

『日本社会探検』¹⁸第6課を改良して使用

目標：友達づくりを意識化し、方法を顕在化させる

表1：授業案

導入 (15分)	友達について
ねらい	意識付け
活動	留学生が自分の経験を話す ・ 出合いやきっかけ ・ 友達とのエピソード ・ 現在の関係
展開1 (30分)	日本人大学生の人間関係に対する意識を知る
ねらい	読解教材を読む ・ 内容を理解する ・ 類似点を考える ・ 相違点を考える
活動	1. 読解教材の音読 － 漢字の読みの確認 2. 内容理解 － 内容質問 3. 類似点・相違点を見つける 4. 発表をする
展開2 (30分)	「日本人と友達になる」ための姿勢について考える
ねらい	・ 自分の姿勢を振り返る ・ 今後の姿勢を考える
活動	1. 具体的な行動を発表する － 一つ、どこで、どのようなきっかけで日本人と友達になったか 2. 今後の行動について話し合う － 友人関係を続けるために必要なこ

	とは何か
まとめ (15分)	友達との付き合いで大切なものは何か
ねらい	
活動	1. 親友と友達の違いを話し合う 2. 親友や友達から受けた影響について話し合う

上記の案を実施するために、以下のような具体的な授業内容の検討を行った。

6.4. 授業内容

<導入>

授業の導入部分で本授業の意識付けを行う。まず、留学生に対して「どんな友達がありますか」と発問する。また、具体的な話を引き出すために「幼なじみや親友はいますか」と発問し、留学生が具体的な人物を思い浮かべられるように配慮する。発話に必要な語彙は、留学生の発話に応じて補充する。

留学生にとって、普段の教科書に沿った授業とは異なり、なぜこのような質問がされるのかという疑問が浮かぶと考えられる。そのため、この授業では普段意識していないことを意識的に考えることが必要である。留学生に「今日は何をするのだろうか」「友達と親友の違いは何だろうか」などの驚きや疑問を抱かせることが重要である。

<展開1>

日本人大学生の人間関係に対する意識について書かれている読解教材を黙読する。読み方や意味が分からないものは調べるように指示する。この教材は、日本人大学生が座談会を開き、人間関係と結婚について話しているものである。教材として使用したのは人間関係について話している部分のみである。それは、本実践の目的が「日本人と友達になる」ことについての意識化であるため、結婚についての日本人学生の意見は、他の機会としたほうがよいと考えたためである。

読解教材の本文は、留学生に音読をさせる。日本人大学生5名の意見は、漢字にルビが振られていない教材であるため、音読させて読み間違いがないかどうか確認をする。教材の内容が理解されているかどうか、内容質問で確認をする。その後、日本人大学生の意見を読んで、自分の考え方との類似点、相違点を書き出し発表する。その際に、日本人学生の誰のどのような意見との類似点なのか、相違点なのかを明確にするよう指示する。

自分が友達との人間関係をどのように考えているのかを振り返り、意識化するためには、比較の対象があるほうがよいと考え、日本人大学生の人間関係に対する意識を読むことにした。

<展開2>

1ヶ月の留学生生活を振り返り、自分は「日本人と友達になる」ためにどのような行動をしてきたか、具体的に考える。いつ、どこで出会い、どのようなきっかけで日本人と友達になったのかを発表する。また、友人関係を続けるためにどのような努力をしているかも発表する。

個人でそれぞれの経験を振り返った後で、他の留学生の発表を聞く。また、今後の留学生活で自分はどのような姿勢で日本人と接するのかについて考える。

<まとめ>

展開2では、友人関係を続けるための具体的な方法を考え、まとめでは、親友や友人との付き合いで大切なことは何かを話し合う。

7. 実施概要

上記のように計画された授業は、以下のように実施された。修正・変更点も述べる。

7.1. 修正・変更について

・読解教材の扱い方

当初の計画では、読解教材を授業時間内に配布し、語彙の意味調べなどを行う予定であった。しかし、前週に事前に印刷したものを配布することにした。これは、授業担当者が1ヶ月授業を行う過程で、留学生Eの漢字習得が他の学生と差があることに気づいたためである。留学生Eは、留学時に習得済みの漢字が他の学生より少なく、電子辞書などで調べる習慣もなかった。来日後、電子辞書を購入したが、教科書の漢字の読みを調べる際に、タッチパネルに表記を写すことに時間がかかる様子が窺えた。そのため、授業時間外に予習として漢字の読みや語彙の意味を調べることを宿題とした。

本文中の「無気力な人」や「腐れ縁」などの語彙については理解確認をした。辞書的な意味の確認の後、どういう人なのか、どういう関係を指しているのか補足をした。

・1ヶ月の留学生生活の振り返り

具体的な日本人の友人との出会いのエピソードなどが発表されることを期待していたが、留学生5名が共通に知り合っている、チューターなどの話はしにくいようだった。また、友達と呼べる日本人がまだいないと話す留学生もおり、日本人学生と接触する機会があまりないとの意見もあった。そのため、この1ヶ月だけを振り返るのではなく、留学前に日本人の友達がいたかどうか質問し、いつ、どこで出会い、どのようなきっかけで友達になったのかを振り返るように指示し、発表することにした。

7.2. 授業の様子

以下、授業中の発表から明らかになった留学生の人間関係に対する考えや彼らが持っている「日本人と友達になる」ことへの意識や姿勢について紹介する。

・友達について

それぞれの留学生に授業の導入で友達について話してもらった。留学生Eは、高校時代、よく一緒に勉強した友達が親友であると話している。留学生Fは、幼なじみが今は親友だと話した。一緒にたくさん遊んだ思い出があり、昔のように同じ時間を過ごすことは少なくなったが、久しぶりに会うと楽しい時間を過ごすことができるとのことだ。留学生Gは、今は日本にいたので電話をすることはできないが、大学の友達とメールで連絡をとっているとのことである。

5名、それぞれが発表をしたが、子どもの頃一緒に遊んでいて友達になった人や共有する時間や場所があったクラスメイトについて話した。これは、「友達になる」ということが意識的なことではなく、無意識的に行われていることだったからだと考えられる。

・読解教材による気づき

日本人大学生の人間関係に対する意識を知り、共通点や相違点があることに気づいている。留学生Gは、日本人学生の「積極的に付き合いを広げる努力をしていない(本文8行目)」という意見に対して、自分も受け身に積極的に働きかけをしないことに気づいたと話している。また、留学生Hは、自分が大学に入学した当初、日本人大学生の意見と同じように「付き合い方が広く浅くなる(本文15行目)」と感じたことを話している。これは、高校までとは異なり、自然に友達になるのは難しいことだと自分自身も感じているためである。

留学生Iは、「今は以前の友達と連絡を取ろうとはしていない。自分から努力するのは恥ずかしいし、格好が悪い、と考えてしまう(本文20-23行目)」という日本人大学生の意見に対して、自分は「恥ずかしい、格好が悪い」とは考えないと話している。留学生Iは、積極的に努力しているという意識はないが、なぜ恥ずかしいのか、格好が悪いと思うのかは分からないと話している。

このように、読解教材を読むことで、同じ大学生として共感できる部分と異なる部分に気づいている。

・日本人と友達になることについて

留学前に友達になった日本人については、それぞれがさまざまな経験を話した。留学生Gは、インターネットを使って日本人の友達とよく連絡を取っていたことを話している。また、留学生Iは、近所に日本人が住んでおり交流があったことを話した。以前にホームステイの経験がある者も複数おり、そのときの話もあった。

しかし、今回の来日から1ヶ月について質問すると、友達と呼べる日本人がまだいないと話す留学生もおり、日本人学生と接触する機会があまりないとの意見もあった。また、イベント的な行事で日本人学生と一緒に時間を過ごしても友達になれたかどうかはまだ分からないとの意見もあった。

このことから、この1ヶ月の間には、留学生自身が積極的に「日本人と友達になる」努力や働きかけをしていないことを意識化することができた。

・今後の行動について

留学期間中に日本人と友達になるためには、意識的に共有する場所や時間を持たなければならないとの意見が出た。また、友達として継続した関係を築いていくために必要なこととして、「顔見知り」から「友達」になる必要があるとの意見もでた。これは、学校外で会うことができる関係になるかどうか大きいと考えられる。また、友人関係を継続させるためには「楽しさ」や「気楽さ」が大切だとする意見だけでなく、「思いやり」も大切だとする意見もあった。方法としては、携帯電話のメールによる連絡が手軽で便利だとする意見で一致した。

8. まとめと今後の課題

本稿では、留学生が短い留学期間で「日本人と友達になる」ための意識喚起と問題解決の方法を考える機会となった。

本授業を実践し浮き彫りとなった今後の課題を以下に記す。まず、本授業の問題点を示し、今後の授業のための改善点を明らかにする。次に、このプログラムに参加している留学生を取り巻く環境の問題点や留学生の意識の問題点を示し、今後の課題を明らかにする。

<本授業の問題点>

・授業時期の問題

本授業は、留学生が来日して1ヵ月後に行われた。授業者がこの時期を選択した理由は、なるべく早い時期に「日本人と友達になる」ことを意識化させたいとの意図があったからである。留学生は、来日当初の1ヶ月を「日本人と友達になる」時期だとは考えておらず、生活や留学生同士の関係を築くことに多くの時間を有していた。そのため、「日本人と友達になる」ことの難しさはまだ感じていなかった。授業者は、同じプログラムに参加した留学生や日本に滞在している留学生が実際に抱えている問題としてこのテーマで授業をすることに決めたが、本授業の対象者にとっては、これから起こる可能性のある問題であると考えられるが、現状では問題になっていないものであった。このことから、このような授業を実施する場合の実施時期については再検討が必要だ

と考えられる。

・使用教材について

今回使用した読解教材は、日本人大学生が人間関係についてどう考えているかが書かれているものであったが、これは留学生との人間関係を想定された意見ではない。日本人大学生が「留学生と友達になる」ことについてどのように考えているのかは扱われていない。例えば留学経験のある日本人学生に体験を語ってもらう機会を用意したり、留学生の友達がいる日本人学生の意見などを提示したりする必要があるのではないかと考えられる。これらは、次回授業を計画する際に考慮されるべき点だと考えられる。

・発表の方法

通常の授業では、5名の留学生の発言の機会を均等にしたいという意識が授業者にあった。そのため、授業者が発問する場合、留学生が自発的に発話を始めることは少なく、目が合った場合や特別答えたいことがある場合意外は授業者が発話の順番や機会を管理していたといえる。本授業においても授業者が「Eさんはどうですか」や「Hさんはどう思いますか」などと次の発言者を指定するケースが多く見られた。そのため、話し合いという形式にはならなかった。留学生同士の人間関係の問題や日本語能力の差もあることから、一概に自由発言が良いとは言えないが、留学生同士の意見交換ができる発表形式を考える必要がある。

<留学生を取り巻く環境の問題点>

・来日時期

留学生と日本人学生が交流できる学内のパーティーや寮のパーティーは、4月に行われているものが多く、正規入学した留学生を対象にしたものである。そのため9月に来日した短期留学生は、そのような交流パーティーに参加できるのは、約半年後になっている。

・プログラム参加者の人数

このプログラムに参加している留学生は5名である。5名は同じ寮に住み、同じプログラムに参加していることから通学も一緒にしている。留学当初の1ヶ月は、特に留学生5名が「友達になる」ことが優先されていたと考えられる。同じ大学から留学している者もいるが、学年が違ったり、専門が異なったりすることから、留学前から友人関係にあったわけではない¹⁹。5名が同じ時間や場所を共有することで友達になろうとしていたと考えられる。そのため、5名で行動する場面が多くなり、日本人学生と接することよりも優先されていたと考えられる。

・チューターについて

チューターは、授業者として関わっているため、同じ大学に通う学生であっても友達になるのは難しいのではないかと考えられる。授業があるため定期的に会ってはいるが、5名の学生の中で誰かひとりと食事に行ったり、買い物に行ったりすることには抵抗があるのかもしれない。ここでも5対1の関係が成立してしまっている。

このような環境はすぐに改善できるものではない。しかし、このような問題があることを明確にすることで、留学生と接する国際交流室の職員や担当教員、プログラム担当教員、チューターがプログラムの中に日本人学生と接するカリキュラムを組み入れることが可能となると考えられる。例えば、日本人学生に対するインタビュー活動を課題として取り入れたり、授業中にゲストを招いてビジターセッション²⁰をしたりすることも考えられる。

また、留学生には、授業者である学生チューターではない個人チューターが留学生一人一人に必要なだと考えられる。留学当初から日本人の個人的な友達が一人できることで友人関係を広げるきっかけになるのではないだろうか。また、個人チューターが担当教員との仲介役になることや履修登録の手伝いをするなども可能である。このような個人的な関わりを持つことで、お互いが積極的に関わるきっかけを掴むことができるのではないだろうか。

実際に、留学生と友達になりたいと思い、勇気を出して声を掛けてくる日本人学生もいることから、日本人学生側にも個人的に留学生と関係を築きたいと希望している学生がいると考えられる。また、提携校へ留学した経験のある学生やこれから留学を希望している学生などと交流する機会を作ることで共通の話題も生まれやすくなると考えられる。留学生にとって教室外での日本語使用場面が増えることは、言語的にだけでなく、さまざまな文化的な習得が進む機会が得られると考えられる。また、教科書で習得する語彙だけでなく、さまざまな分野の語彙や表現を習得する機会にもなるため必要だと考えられる。

<留学生の意識>

・日本語使用への期待

留学生は、日本に来日する前からさまざまな期待を抱いている。それは、これまで習得した日本語を使って「新聞が読めるようになりたい」という希望や「自分の日本語力に自信を持ちたい」などの希望であった。また、「日本人の友達をたくさん作りたい」などとアンケート²¹に答えている。これは、教室での学習だけでなく、教室外の日本語使用への期待があることが伺える。教室場面と日常場面では、異なる習得があると考えられ、留学生自身もそのことを意識していると考えられる。

しかし、授業内の発言などから、教室外には思ったよりも日本語を使う機会がないため、教室内で使う機会を増やして欲しいとの意見もあった²²。

・「日本人と友達になる」ことへの意識

本授業を実施したことで、留学生の意識がどのように変化したのかは明らかではない。しかし、約1ヵ月後(12月上旬)の授業の休み時間(1限目と2限目の間)に1人の日本人学生が教室の前で待っていた。1限目の授業が終わり、留学生Gが教室を出たところで日本人学生が留学生Gに向かって「友達になってください」と言った。授業者は、教室の中から様子を伺っていた。その後Fさんも合流し、2人が日本人学生に対して名前や専攻を聞いている様子が見られた。日本人学生は、彼女たちがどこからの留学生なのかを質問していた。

授業者は、2限目の授業の始めに、留学生GとFに休み時間の出来事について聞いたところ、Fさんが嬉しそうにメールのアドレスを交換したことを話した。また、留学生Gは、「日本人は、本当に『友達になってください』と言うんですね」と笑いながら話した。そのため授業者は、「次に会う約束ができるといいですね」と話した。

彼らはすでに、友達になるためにはさまざまな方法で連絡をとり、時間を共有することが重要であることを意識している。そのため、短い休み時間にできる限りの情報交換を行い、連絡先の交換をしている。自分から積極的に日本人学生に声を掛け、「日本人と友達になる」努力をしているかどうかは明らかではないが、日本人学生からの働きかけには積極的に応じている様子が伺えたことで、授業前とは少し意識や姿勢に変化が見られたのではないかと考えられる。

1 大学入学をめざす日本語学校生や高校への留学生に与えられる資格は「就学」であり「留学」とは区別されている。

2 法務省入国管理局ホームページは以下の通りである。
<http://www.moj.go.jp/PRESS/080601-1.pdf>

3 林里香「聞き返しの言語管理」千葉大学大学院社会文化科学研究科博士論文 2008

4 林里香「接触場面における聴解問題に対する留意の分析」第21回社会言語科学会研究大会(於東京女子大学)研究発表 予稿集 pp.152-155 2008

5 言語的な問題、社会文化的な問題、社会言語的な問題とは、母語話者と非母語話者がインターアクションを行う際にそれぞれの能力(言語的能力、社会文化的能力、社会言語的能力)によって引き起こされる問題である。詳しくはJ.V.ネウストブニー『新しい日本語教育のために』大修館書店 1995

6 「語学学習クラスにおける他者紹介活動の可能性－韓国語学習者を対象にした実践－」『授業実践開発研究』第1巻 2008

7 本授業の参加者である5名の留学生は全員20代の女性である。

8 留学生の声については、6.1 前年の留学生に対するインタビューの振り返りで詳しく述べる。

9 留学生Fは、ドイツ生まれで、ドイツとフランスの二重国籍を持っている。

10 日本語能力試験の文法・読解、聴解問題（2007年度2級『平成19年度 日本語能力試験 試験問題と正解 1・2級』財団法人日本国愛教育支援協会 独立行政法人国際交流基金 凡人社 2008）を模擬試験として実施したところ2級合格者以外の4名は、50%程度の正答率であった。

11 国際交流室は、提携校をはじめ、海外へ留学を希望する学生の窓口になっている。大学主催の海外研修や認定校への長期留学プログラムなども行っている。また、海外提携校からの留学生受け入れ業務も担当している。

12 『ニューアプローチ中級日本語基礎編』日本語研究社教材開発室『漢字マスターvol.3 2級漢字1000』アークアカデミー

13 日本留学試験は、2002年より年に2回実施されている（独立行政法人日本学生支援機構）。この試験は、日本の大学（学部）等に入学を希望する者のための試験である。日本語以外に理科（物理・化学・生物）、総合科目及び数学があり、受験科目を選択して受験することが可能である。日本語の試験以外は出題言語を日本語と英語から術ガン時に選択することも可能である。ホームページは以下の通りである。

<http://www.jasso.go.jp/eju/index.html>

14 日本に來日する前に、地震について心配をする留学生は少なくない。また、留学中に地震を経験するものもいることから、筆者は無料で地震体験できる施設、防災館の情報を留学生に提供した。東京消防庁のホームページは以下の通りである。

<http://www.tfd.metro.tokyo.jp/index.html>

15 日本語教師やチューターとしてだけでなく、ゼミの仲間、研究仲間、或いは友達として留学生と日常的に接している。

16 ダブルダッチのサークルに所属していた。3～4名のグループで、2本の縄を使って毎日のように練習していた。一緒にコンテストにも参加した。また、練習以外にも昼休みにサークルのメンバーが自由に集まる場所があり、よくそこへ顔を出していた。

17 同じ提携校からの留学生であり、使用する寮なども同じである。

18 架谷真知子・佐藤恵美・二村直美 共著『日本社会探検』スリーエーネットワーク

19 名前や専攻などは事前に知っており、メールで連絡をとっている場合もあったが、スイスからの留学生2名は、留学時に空港で始めて会ったと話している。

20 ビジターセッションが日本語教育の現場でどのように取り入れられているかについては以下を参照のこと。村岡英裕「実際使用場面での学習者のインターアクション能力について—「ビジターセッション」場面の分析—」『世界の日本語教育』第2号、pp.115-127 1992

21 留学前に国際交流室に提出される書類の一種で日本語レベルの調査を主な目的としているものである。

22 国際交流室の職員と日本語で話す機会は日常的にあったが、留学生5名の間では常にフランス語が使われていた。そこに1人でも日本人学生が加わることで使用言

語は日本語にシフトし、日本語使用機会は格段に増加すると考えられる。そのため、留学して早い時期から「日本人と友達になる」ことを意識化することは必要だと考えられる。